注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
タダクニの日常

【作者名】
龍気

【あらすじ】
「男子高校生の日常」の存在感に欠ける主人公タダクニを、本当の主人公にして行こうという話です。

＊
久しぶりに男子高校生の日常を最初から読んで衝動的に、それとヒロインとの絡みを練習するために書きました。

各話千～2千文字以内のショートストーリーの予定です。

主人公はタイトル通りタダクニで、原作でタダクニが出てない話に・・・多いな・・・、女子高生は異常にタダクニを組み込んでみたりしたり、
少数のハーレム（注・腐ではない）等を考えております。

話の順番は適当に、それでいて矛盾が無いように時系列バラバラにしていきます。

この作品では名字や名前が判明してないキャラに仮でつけますのご注意を。

今更かよと思いの方も多いかと思われますがどうぞ暇つぶし程度にお読みください。

第1話『タダクニとイベント』

「やべえ!!遅刻する!!」

この何処にでも居る平凡な少年の名はタダクニ。

個性豊かな友人達に囲まれ、必然的に影が薄く存在感に欠ける事を気に病む男子高校生だ。

如何やら寝坊かなんかで、遅刻しそうであるのか全力で学校に向かうと言う、なんとも在り来たりで平凡な行動をしていた。

「んっ?あれって・・・ミツオ君?」

そんな中、反対側の歩道を歩くクラスメイトのミツオを見かけ少し足を止めてしまう。

(俺と同じで遅刻しそうだってのに、余裕に歩いてる・・・ひょっとして遅刻しそうだって事に気付いてないのか?流石ミツオ君)

どうやらミツオはタダクニからしたら、ある種残念な男子の様だ。

そんなミツオが曲がり角に差し掛かる直前、曲がり角の向こうから食パンを口に銜えて走る他校の女子の姿が見えた。

(こっ!これは食パンを銜えて走る女子とぶつかって、その子との恋が始まると言う少女漫画でありきたりな展開!?
あのミツオ君に彼女が出来るかもしれないだと!?そんな事そS・・・じゃなくて普通に危ないから止めないと!)

本心と建て前をかねてミツオを止めようと声を上げ様とするタダクニ・・・しかし・・・。

「ちっ・・・靴紐が・・・」

たったったっ・・・

「・・・えっ？」

何とぶつかる直前、靴紐が解けている事に気付き、その場で止まり靴紐を結ぶミツオ。

その結果女子とぶつかる事も、存在を知る事も無く、何事も無く歩き出すミツオ。

「あんなベタで嬉しおいしいイベントを直前で逃すなんて・・・流石ミツオ君・・・」

彼は本当にタダクニが思う様に、色々と残念な男子の様だった・・・。

「って!!ミツオ君の残念イベントを見てる場合じゃない!!遅刻!!」

遅刻しそうであった事を思い出し、慌てて走り出すタダクニ・・・

しかし・・・先程のミツオ同様、

曲がり角に差し掛かった時。

ドンッ!!

「うわっ!?」

「きゃっ!?」

ミツオと違い誰かとぶつかり転倒するタダクニ。

そしてぶつかった相手の声からして歳の近い女子である事は理解できた。

「だっ！大丈夫⁉」

「うっ・・・うん・・・大丈夫・・・」

ドキッ‼

（えっ⁉）

ぶつかった女子は真田西高の制服を着たおかっぱ頭の女子だった。

彼女は心配無いと言わんばかりに笑顔で応え、それがタダクニの心の臓を激しく刺激した。

（かっ・・・可愛い・・・）

「あの？如何かした？」

「いっ・・・いや‼その・・・ゴメン！俺慌てていたから・・・」

「ううん、私の方こそごめんなさい・・・私も急いでいたから・・・あっ！私遅刻しそうだから、じゃあね」

「うっ・・・うん・・・じゃあ・・・」

女子は駆け足でその場を去って行った。

残されたタダクニは呆然とその後ろ姿を見詰めていた。

(可愛い子だったな・・・名前・・・聞いとけばよかった)

名前を聞けなかった事に少しガッカリし、その場に立ち尽くす・・・しかしふと足元を見ると手帳の様な物が落ちていた。

「これって・・・あの子の生徒手帳?」

それは真田西高の生徒手帳であった。

タダクニは真田北高で、今の女子は真田西高の制服を着ていた、間違いなく彼女の物だろう。

「う〜〜〜ん・・・今追いかけて果たして間に合うだろうか?こんなの持っていてあいつ等に見られたら何て言われるか・・・」

他校の女子の生徒手帳を持っているところを、からかう事はからかい、弄る事は弄りたおす友人達の事を頭に浮かべ、

すぐに届けに行こうとしたが、もう時間も残り少なく、他校では入る事も出来ないだろうと、仕方なく自分の学校の方へと歩を進める。

「今日の放課後届けに行くか・・・それまで見つからないと良いが・・・それにしても・・・本当に可愛かったな・・・あの子・・・」

これが彼の何時もの平凡な日常が変わるきっかけである事を、この時の彼自身まだ知らない・・・。

第2話『タダクニと上の空』

「で？何か言い訳はあるかな？」

「目覚ましが鳴らなくて寝坊しました・・・」

真田西高の女子とぶつかった後、全力で学校に向かったタダクニであったが・・・結果遅刻しました。

ガラッ・・・

「はよーーーすっ」

「遅刻しておいて堂々と入ってくるな!!」

「えっ!?あれ？俺遅刻したの？」

「「「「「「「遅刻してんだよ!!」」」」」」」」

何故かタダクニより先に学校に向かった筈のミツオが、遅刻している事に気付かずに教室に入って来て全員から総ツッコミを受ける。

その後タダクニと一緒に担任の雷を受け、一時間目は担任の授業だったので、そのまま授業が開始された。

しかし・・・タダクニは今朝ぶつかった女子の事が気になり、上の空だった。

（あの子間にあったかな・・・あそこだったら西高だと、ここより近いから多分間に合うと思うけど・・・）

「じゃあここを・・・」

(何て名前なんだろうな・・・生徒手帳を見ればわかるけど、さすがにそれは人として如何かと・・・)

「それじゃあ今日遅刻した・・・」

(西高行ったら渡してくれるだろうけど・・・出来たらまた会いたいな・・・)

「・た・・く・・・ただ・・・・!」

(それにしても可愛かった・・・特に笑顔が!あれは心配ないと見せる為の笑顔だった!心からの笑顔ってどんだけ可愛いだろう?)

思春期で彼女がいない男子高校生にありがちな妄想に浸り切り、タダクニは自然とニヤケテしまう・・・担任とクラスメイトが見ていることも気付かずに。

「ほう・・・私の授業も聞かずにやらしい妄想とは言い御身分じゃないかタダクニ」

「へっ?・・・えっ!?」

「どんな妄想してたんだよタダクニ!!」

「後で聞かせてくれよタダクニ!出来が良かったら今晩のおかずにしてやるよ!」

「なっ!?えっ!?ちっ・・・違う!!俺はそんな「さっさと教科書読め!!」

「はっはい!!」

　クラスメイトにからかわれて、担任に急かされて、羞恥と焦りで教科書を逆さまにもって読もうとするタダクニ。

「逆さまで読めるほど器用なのかお前?」

「あっ!すみません!!」

「「「「「「「「「あはははははははははははははははははっ!!」」」」」」」」」

　何ともまあ・・・ベタな失態をするタダクニ。

「あっ・・・あの・・・」

「何だ?」

「何処を読めばいいんでしょうか?」

「「「「「「「「「「だははははははははははははははははははっ!!」」」」」」」」」」

「良いぞタダクニ!!」

「今日のお前輝いてる!嫌な意味で輝いてるよ!」

　つまらない授業の中で、誰かの失敗程面白おかしい物は無い、それを盛り上げようとクラスメイト数人が煽り立てる。

「うるせぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ!!好きでこんな事してんじゃねぇんだ!!」

「喧しい!!タダクニ、昨日のやったところだ!!さっさと読め!!」

「はっはい！・・・あの・・・昨日何処までやりましたっけ？」

「「「「「「「「ぶひゃはははははははははははははははははははははははっ!!」」」」」」」」

しかも一回落ちたら中々抜け出せない負のスパイラル・・・担任も呆れて。

「お前は・・・もういい、じゃあもう1人の遅刻者、ミツオ！お前読め！」

「はっ・・・はい・・・・」

もう1人の遅刻者であるミツオに振る・・・しかし。

「・・・・・・すみません・・・教科書を忘れました」

「お前もかい!!」

「「「「「「「「わははははははははははははははははははははははっ!!」」」」」」」」

「流石ミツオ君!!空気読んでる!!」

「こんなの誰にでもできる事じゃねえよ!!」

これがミツオクオリティ。

何時も素で皆を笑わせて、既に起きている笑いを更に拡張させる。

しかし、クラスメイト達が笑っている中で、1人タダクニだけが、また今朝の女子の事を思い、再び上の空になっているのだった。

（早く放課後にならないかな・・・あ～～～～もう一度会いたい・・・）

第3話『タダクニと友達』

「タダクニ、今日は如何したんだよ？」

「遅刻は仕方ないにして、ボーっとして」

「いや・・・何でもない・・・・」

タダクニの友達のヒデノリとヨシタケが、普段と違う様子のタダクニが気になり・・・もといからかいに寄って来た。

「別に・・・朝から走って疲れたからボーっとしてただけだよ（コイツ等に本当は何があったか知られる訳にはいかない・・・）」

よくツルムだけあって、今朝の事を知った後、どれ程弄られ広げられるか分かっているタダクニは平静を装い答える。

（兎に角・・・この生徒手帳を見られたら一発でアウトだ。それにこいつ等の事だ、個人情報どうこう無視して、
中を見ようとするに決まってる・・・放課後まで何とか死守しなければ）

「本当か？何か隠してないか？」

「ゲロっちゃえよ、ｙｏｕゲロっちゃいなよ」

「別に隠してなんか・・・あっ！そうだ」

「何だよ何だよ？やっぱ何かあんのか？」

「まあ・・・俺の事じゃないけど・・・今日学校来る時にミツオ君を見かけたんだ・・・そん時にな」

話題を自分でなくミツオに向ける為に、タダクニは今朝見たミツオのミラクルを話した。

「そのままお互い気付かずに、ミツオ君は「よし」って言って行ってしまったんだ」

「だはははははははっ！流石ミツオ君！そんなレアイベントを寸前で逃すなんて！」

「そんな漫画みたいな展開を逃すなんて、これまた漫画みたいな展開だよ！」

「それで不思議なんだけどさ・・・歩いていたとは言え俺より先に行った筈のミツオ君が・・・俺より後に来たのは何でだ？」

「って言うか遅刻してる事に気付いてなかったから、どっか寄り道してたんじゃね？」

「有り得る、有り得る!!」

「それとさあ・・・これは見間違いじゃないかと思うんだけど・・・」

「「何何？」」

「まあ同じ学校だから同じ道を行くわけなんだけどさ・・・途中靴跡のついた犬のう〇こがあったんだ・・・」

「「・・・・・・・・・」」

タダクニがそこまで言うと2人とも黙ってしまった。

「こっから先は言わないでおこうか・・・」

「そうだな・・・幾らミツオ君でもカワイソ過ぎる・・・」

「うん・・・」

「あっ！モトハルから聞いたんだけどさ、昨日ミツオ君川に飛び込んだらしいぜ」

「何で!?」

「春とは言えまだ寒いのによくやるよな・・・」

普段タダクニを単純だ、扱いやすいと、それを利用して乗せて弄っているこの2人も、基本バカで単純なので、

タダクニの思惑通り矛先を自分に逸らす事が出来た。

その後も何回かピンチはあったものの、何とか切り抜けて放課後。

「おうタダクニ、ゲーセン行こうぜ」

「今日こそ俺の華麗なるＵＦＯテクニック見せちゃる」

「悪い・・・昨日バイト先で忘れ物したから取りに行かないと」

嘘である。

丁度昨日バイトだったので、それをこの2人も知っているのでそ

れっぽい事を言って西高へ行こうとした。

「そうか、なら暇になったら来いよ」

「あぁ悪い、じゃあな」

上手くいったと確信しタダクニは早足に教室から出て行く・・・しかし、それは大きな間違いであった。

「ふっふっふっ・・・甘いなタダクニ」

「今日のお前の様子は明らかにおかしい・・・今朝は上手い事ミツオ君に矛先を向けられたが・・・」

あっ・・・そこは本当に誘導されたんだ。

「お前の秘密、必ず解き明かす・・・」

「知恵袋を授けてくれた・・・ばっちゃんの名にかけて」

しょうもない事にしか使えない知恵を授かったものだ、ばっちゃん悲しんでるぞ。

「行くぞヨシタケ!!」

「おう!!」

そうして2人のタダクニの尾行が始まった。

しかしこうしてみると・・・コイツ等本当に暇で、刺激に飢えてるんだな。

第４話『タダクニと他校』

「さて・・・西高に着いたのは良いが・・・如何しようか」

障害（ヒデノリとヨシタケ）を乗り越え（実は乗り越えてない）タダクニは西高へとやって来た。

しかし部活や学校間での用事以外で他校に入ると言うのは、何かと勇気がいるのだった。

幸いにも西高は共学校なのでまだ入りやすい、これが逆の東女子高なら男のタダクニが入ろうとしただけで警備員のお縄に着くだろう。

「それに・・・この場合職員室か？それとも受付に持って行けば良いのか？」

校門前で生徒手帳をどこへ持って行くか考えていると、帰ろうとしている西高の生徒達が自分を見ているのに気付いた。

「ねえ・・・あの男子、北高の生徒じゃない？」

「何しに来たのかな？」

「おいおい今時他校に殴り込みか？」

「やっぱ男だけだと求める刺激がそっちに行くのかねえ？」

西高の生徒達の自分を見る目と声は、普段存在感に欠けるタダクニにとってキツイものだった。

（くっ・・・このままでも十分目立ってしまう！できたらあの子と会いたいけど、この空気は辛い・・・もう一気に受付まで行って渡すか）

意を決して校門をくぐり、受付まで向かうタダクニ。

その際も西高の生徒達の視線が突き刺さり、恥ずかしいやら何やら・・・まるで見せ物の様に視線を集めたタダクニは、

しばし生き地獄みたいなものを味わい、受付室に辿り着いた。

「あの・・・すみません」

「ん？何だね君は？ここの生徒じゃないね？」

「あっ、俺北高の生徒で・・・その、ここの生徒の生徒手帳を拾ったから届けに・・・」

「ふむ・・・確かにうちの生徒手帳だ、いやありがとう。じゃあ面倒だけどここに名前と連絡先書いてくれるかな？」

「はい」

受付の人に生徒手帳を渡し、受付票に名前を書いて帰ろうとした・・・その時。

「あれ？アナタ今朝の・・・」

「えっ？」

背後から声を掛けられ、振り向くと今朝ぶつかった女子が立っていた。

「あぁ・・・君は・・・」

「如何してここに?何か用ですか?」

「いや・・・その・・・」

まさか会いたいと思っていた人と、本当に再会してしまったタダクニは、しどろもどろしてしまいなかなか言い出せなかった。

「あぁ・・・羽原さん、丁度良かった」

(羽原さん?彼女の名前か・・・あれ?羽原って何処かで聞いた様な・・・)

会いたかった女子、羽原の名をどこかで聞いた事があるタダクニは、しばし記憶の掘り出し作業に入った。

「彼ね君の生徒手帳を拾ってワザワザ届けに来てくれたんだよ」

「えっ?・・・あっ本当だ生徒手帳が無い!」

「いや〜〜〜呼び出す手間が省けた・・・はい、もう落とさないでね」

「すいません・・・あっその、ありがとうございます」

受付の人から生徒手帳を渡された女子、羽原はタダクニに礼を言う。

「えっ?いや・・・そもそも俺がぶつかったから落とした様なものだし・・・」

「いえ・・・それなら前をちゃんと見てなかった私も同じですよ。えっと・・・」

「あっ、俺タダクニって言います。高木忠邦、北高の2年です」

「タダクニ君か、私は羽原優衣・・・同じ2年生だよ」

(羽原優衣さんか・・・良い名前だな・・・でも、やっぱりどこかで聞いた事があるような気がする・・・)

念願の再会と彼女の名前を聞けたタダクニは今や今年一番、幸せの絶頂であった・・・。

しかし、時を同じく・・・西高校門付近では・・・。

「おい・・・タダクニの奴・・・校内に入って出てこないぞ」

「アイツ西高に何しに来たんだ?」

タダクニを尾行していたヒデノリとヨシタケが待ち伏せていた・・・と言うより、他校に入る勇気が無く立ち往生していた。

「最初は殴り込みかと思ったけど・・・タダクニってあれで結構喧嘩強いんだよな」

「そうなの!?」

「お前とは中学からだけど、俺とタダクニは小学校からの付き合いでさ、アイツその時からツッコミポジションで、

当時騒ぎを止めるのは主にタダクニの役目だったんだ、当然今みたいにおふざけで止まる訳もなく、

最終的に何時も喧嘩・・・時には1対数人って事もあったけど全勝だったな」

「マジで!?」

(あぁ・・・でもさすがにアイツには負けたんだよな・・・その後リベンジして引き分けたけど、
タダクニ自身、試合は引き分けで、俺自身の勝負は負けだって言ってたっけ)

初めて知ったタダクニの小学生時代の戦歴に驚愕するヒデノリとそれを懐かしむヨシタケ。

「普段のタダクニからはそんな過去があるとは想像できん」

「いや・・・そん時からタダクニはあんな感じだったな・・・喧嘩も相手から吹っかけて来るか、
いじめられてる奴を助ける為だしな(まあその為ラバーシューターが誕生したんだよな・・・その所為であの決戦に駆り出されたっけ・・・)」

「そういや・・・アイツって何気に運動神経、学年内でも良いよな?」

「ん?あぁ・・・小学生の時もそうだったな。妹も強いし・・・アイツの血筋どうなってんだ?」

あの妹にしてこの兄有り・・・タダクニの血筋に若干の恐怖を感じ、2人は背中に冷たい物を感じた。

「しかし・・・出てこないなタダクニの奴」

「もう待てねえ・・・俺達も突入するか？」

「あぁ・・・今なら帰ろうとする生徒も少なくなったしチャンスだ！」

「乗り込めーーー!!」

「「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」」

しびれを切らして西高へと突入するヒデノリとヨシタケ。

もう少しで校門をくぐる・・・という時に、ヒデノリにとって思いもよらない門番が立っていた。

「おおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉっ・・・ぃぃぃぃぃぃぃぃやあああああああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

「えっ!?ちょっ!?ヒデノリ急に如何した？」

1人の・・・たった1人の女子の姿を見た途端ヒデノリは表情を歪め、急にUターンして全速力でその場を離脱した。

「おい！ヒデノリ待てよ!!俺を他校に1人にするな!!」

1人校門をくぐってしまったヨシタケは、自分だけに集中する視線に耐えきれず、急に逃げ出したヒデノリを追いかけて西高を出た。

「・・・・・・・・・ん？」

その様子を少し遅れて気付いた・・・黒いロングヘアーの文学少女が頭に？を浮かべ見ていたと言う・・・。

第5話『タダクニと羽原』

「タダクニ君、生徒手帳ありがとね」

「いや・・・そんな・・・」

互いの名前を教えあった後、タダクニと羽原は共に歩いていた。

「でも・・・ワザワザ届けなくても、生徒手帳を見れば連絡先が分かるのに、それで連絡してくれたら私から取りに行ったよ」

「いや・・・流石にプライベートに関わる事が書いてあるかもしれないからそれは・・・ね？」

「あっ・・・ありがとう・・・優しいんだねタダクニ君って」

「そんな・・・当然だよこれ位、女の子のプライベートを勝手に見たら怒られるし失礼なのは妹で体験済みだからな」

「妹さんが居るんだ」

「うん・・・仲は良くないけどね・・・」

妹との仲を話すタダクニの表情は、普段ヒデノリ達と話す時のそれとは違い、どこか寂しそうだった。

「えっ？どうして？」

「まあ年頃ってのもあると思うけど・・・嫌われる原因は殆ど俺にあるし・・・仕方ないさ」

「何か・・・あったの？」

「えっ？いやそれは・・・」

言える筈も無い、ヒデノリとヨシタケに謀られ、言葉巧みに乗せられ調子づいて、妹の衣服や下着を着て女装してしまった等と・・・。

(絶対に羽原さんには知られたくない!!)

「如何したのタダクニ君？顔色悪いし・・・汗凄いよ・・・」

「あっ！えっ!?いやっその・・・俺としても嫌な思い出だからちょっとね・・・」

「あっ・・・ゴメンね・・・私ったら殆ど初対面なのに失礼な事聞いて・・・」

「いやっ・・・羽原さんの所為じゃないよ・・・俺が勝手に顔色悪くしただけだし！」

「ううん・・・嫌な事を思い出すのって本当に辛い事だから・・・ゴメンね・・・タダクニ君」

「・・・羽原さん」

羽原にも思い出したくない思い出があるのだろうか？

その時の羽原の表情はとても落ち込んで見え、タダクニは彼女をこんな表情にさせてしまった事に、心が締め付けられる感じに陥った。

「羽原さん、そんな俺なんかの為に落ち込まないで・・・その・・・折

角の可愛い顔が台無しだよ！」

「えっ!?」

「へっ？・・・あっ!!」

羽原の落ち込んだ顔が見たくなく、励まそうとしてタダクニはつい本心を口にしてしまった。

「いっ・・・いやいや！今のは冗談で！って・・・いや冗談と言っても決して羽原さんが可愛くないわけじゃ無くてって！

もう俺は何を言ってるんだ!!」

タダクニは顔を真っ赤にして誤魔化そうとしたが・・・テンパってまた本心を言ってしまう。

「ふふ・・・タダクニ君って面白い人だね」

「えっ？」

「私は可愛くないよ・・・決して可愛い女じゃない・・・」

「羽原さん？」

「でもね・・・冗談でも嬉しかったよ・・・ありがとうタダクニ君」

にこっ

ズギューーーーーーーーンッ!!

（ぐぼっ!!かっ・・・可愛すぎる・・・こんな可愛い女子がこの世界に

いたなんて・・・）

羽原のはにかんだ笑顔に、タダクニは完全に心を鷲掴みされてしまった。

「タダクニ君？」

「はっ!!何？」

「私帰りこっちなんだけど・・・タダクニ君は？」

「あっ・・・俺もこっち、多分今朝ぶつかった所までは一緒だと思うよ」

「じゃあそこまで一緒に帰ろうか？」

「えっ!?」

羽原からまさかの一緒に下校のお誘い。

突然の事にタダクニは暫し呆然となった。

「如何したの？それともこの後何処か用事があるの？」

「いえ！暇です!!何も用事がありません!!一緒に帰らせていただきます!!」

「はは・・・変なタダクニ君、やっぱり面白い」

「そっ・・・そう？」

「うん・・・今日初めて会ったけど・・・一緒に居て楽しいよ」

「あっ・・・ありがとう・・・俺もその・・・羽原さんと居て・・・楽しいです」

「ありがとう・・・じゃあ行こ」

「うん・・・」

そしてタダクニと羽原は一緒に帰路についた。

人生初の女子との下校に、タダクニの心臓は激しく脈打つのだった。

第6話『タダクニと一緒に下校』

「タダクニ君の学校って男子校だよね？どんな感じなの？」

「どんな感じと言われても・・・無駄にバカが多いとしか・・・」

タダクニの通う真田北高は千差万別、多種多様のバカが集結している。

それは生徒だけに及ばず、教師も少し抜けていると言うか個性豊かというか・・・。

「俺の担任、進路指導も担当していてさ・・・今学期の頭に3年生の進路調査を集めた時に・・・」

生徒会に居るタダクニのクラスメイトが、生徒会長と副会長から聞いた話によると。

進路希望に大半の3年生はふざけてツッコミ満載の内容を書き、それに対しタダクニの担任は1つ1つに怒声交じりのツッコミを入れていき、

途中真面目な進路希望が書かれたものに対し・・・・。

「ボケろよおおおおおおおおおおっ!!って叫んで教卓をひっくり返したらしい・・・」

「ははははっ！面白い先生だね」

「ノリが良いのか何やら・・・来年から俺達にも関わる事だから、ちょっと不安になるな」

「あっ・・・そうか・・・もう来年には進路とか色々考えないといけないんだね・・・タダクニ君は進路とかもう考えてるの？」

「そうだな・・・特に考えてないけど・・・羽原さんは？」

「私も・・・今の所やりたい事とか見つからなくて」

「そうか・・・やりたい事、目標が有ったら多少はマシなんだろうけどな・・・」

来年から自分達も進学や就職を考えなければいけない学生らしい会話を、タダクニは内心緊張しながらしていた。

女子と下校した事も無く、男子校に入ってからしばし忘れていた女子との会話に、それと先程つい可愛いと言ってしまった事から、同じ失敗はしないと慎重になりながら会話をしていた。

「1年って長い様で短いからあっという間だね」

「まあ・・・今のとこ目標があるとしたら、卒業するまでに貯金をある程度貯めとく事かな」

「貯金って・・・如何して？」

「俺高校卒業したら一人暮らしを始めようと思ってるんだ、その方が自由きくし、何より妹が・・・」

タダクニは卒業した後、就職か進学のどちらかをしたとしても、1人暮らしをしたいと思っていた。

自由がきくのもあるが、1人立ちしたい気持ちと、妹と離れたい思いもあった。

「まあ・・・嫌ってる奴と居ても苦痛だし、ダチ連れ込むと色々とね・・・」

「嫌ってるって・・・タダクニ君の方じゃなくて、妹さんがって事だよね？」

「まあね・・・何だかんだ言って妹だしね・・・」

「・・・タダクニ君は妹さんと仲良くしたい？」

「そりゃあね・・・できる事ならそうしたいけど・・・」

仲良くなりたいと言うよりは、仲直りしたい・・・タダクニはそう思っていた。

最初から仲が悪かったわけではない、成長するにつれ変わる心境や考え方、そして様々な出来事、兄妹の仲が変わっていくのはある種仕方が無い事ではある。

しかし、それを如何したかはタダクニ自身が決める事だ。

「タダクニ君は妹さんと仲が悪くなった原因は分かってるんだよね？」

「全部って程じゃないけど・・・殆ど俺の所為だな」

女装してしまった時も、自分がちゃんとヒデノリ達を止めていれば等と少しネガティブな考えのタダクニ。

「タダクニ君・・・妹さんにちゃんと謝った？」

「えっ？・・・ちゃんと謝って・・・いないな・・・」

タダクニは妹を怒らせた時の事を振り返ると、その場の勢いで謝ってはいたが、キチンと謝ってはいなかった事を思い出す。

「じゃあ先ずは謝ろうよ」

「えっ？」

「例え赦してくれなくても、先ずは気持ちを・・・ごめんなさいって気持ちを伝える事が大事だよ」

「羽原さん・・・」

「何かしたいなら先ず行動しないと・・・何も変わらないよ」

「・・・そうだね・・・ありがとう羽原さん」

「うん、がんばって、お兄ちゃん」

にこっ

「はっ・・・はい！」

本日何度目かになる羽原の笑顔を見ての鼓動の高鳴り・・・タダクニは確信する・・・。

（俺・・本気で羽原さんに惚れた・・初めて女の子を好きになった・・）

人生初の恋・・・この世に生を受け17年後の初恋。

その初めての感情に、タダクニは戸惑いの様なものを感じ・・・暫し黙ってしまう。

「あっ、私こっちだから・・・またね。タダクニ君」

「あっ・・・うん・・・羽原さん」

「何？」

「その・・・ありがとう」

「ふふ・・・お互い様だよ。じゃあまたね」

「うん・・・さよなら・・・」

帰る羽原を見送り、暫しタダクニは呆然とその場に立っていた。

「羽原さん・・・はぁ・・・俺の意気地なし・・・連絡先くらい聞けよ・・・」

連絡先を聞きたくて呼び止めたのに、肝心な時にヘタレが発動して聞けず仕舞い。

暫し自己嫌悪に陥るも・・・最後に羽原が言った一言を思い出した・・・。

『じゃあまたね』

「またねって事は・・・また会おうって事？・・・羽原さんは・・・俺とまた会っても良いと思ってる？」

羽原の言葉をそう解釈したタダクニのテンションは・・・一気に頂点まで達し。

「いよっしゃあああああああああああああああっ!!はははははははははははっ!!いえええええええええいっ!!」

歓喜の雄叫びを上げながら家へと向かって行くが・・・その様子を近所の人に見られ、後日からかわれる事をこの時のタダクニはまだ知らない。

第7話『タダクニの妹』

「ただいま・・・」

羽原と別れた後、上がり切っていたテンションは家に着く前に何とかクールダウンし、何時も通りの感じで家に入った。

(妹は帰って来てるようだな・・・父さんと母さんは今日も遅くなるって言ってたな)

両親は共働きで、タダクニが中学に上がった位に仕事が忙しくなり、家を空ける事が多くなった。

ヒデノリやヨシタケ、他の友達がよくタダクニの家に集まるのもそこにあった。

(今日は何作ろうかな・・・)

母親がいない時の食事は主にタダクニが作っていた。

1つ下とは言え、まだ当時小学生だった妹の世話をする中で、兄としてタダクニが食事を作ると言い始めた。

初めは家庭科の授業で習った料理を、次に母親に作り方を教えてもらい、基礎が出来上がった頃には自分で味付けする様になり、次第にタダクニは料理が得意となっていき、今では家族で一番料理が上手くなった。

「その前にちょっと休むか・・・」

ハイテンションで帰った反動か、疲れが出てきたタダクニは自分の部屋に行った。

「ふう・・・羽原さんか・・・」

部屋に着いてすぐ横になったタダクニは、今日一目惚れした女子、羽原の事を思い出していた。

(大人しくて優しい雰囲気の・・・胸はちょっと小さいかもしれないけど、またそこが良い)

好きな女子のスタイルを気にする辺り、タダクニも健全な男子である。

(でも何よりも・・・あの笑顔が凄く魅力的で可愛かったな・・・)

羽原の笑顔を思い浮かべるだけで心臓が高鳴る、しかし身も心も癒される感じがした。

『タダクニ君は妹さんと仲良くしたい?』

「・・・妹・・・愛衣と仲良くか・・・」

羽原に言われた事を思い出し、タダクニは妹の・・・高木愛衣の事を考え出した。

(愛衣と仲が悪くなったのは、アイツが中学になって少ししてからだったな・・・)

『あのさ・・・あまり構わないでくれる?』

（あの一言から距離が離れ始めたんだよな・・・昔はよく一緒に遊んだのにな・・・）

『お兄ちゃん！おままごとしよ！』

『海！お兄ちゃん海だよ！』

『お兄ちゃん、お花の冠あげる、愛衣と一緒』

（まあ・・・親離れならぬ兄離れか・・・それだけ愛衣も成長したって事だよな・・・あの時の言葉、
少し寂しさもあったけど・・・同時に少し嬉しかったんだよな・・・愛衣が成長したって事が嬉しくて・・・）

だが何時からか、自分は妹に嫌われるような事ばかりしてしまい、1月に1回会話をするかしないか、
妹からは特に何も無い・・・そんな兄妹関係となっていた。

（卒業したら家を出て1人暮らしをする・・・そうしたかった、愛衣にも迷惑をかける事も無くなる。
それが良いと思って俺からも特に何もしなかった・・・でも、それと謝らないのは違うよな）

『じゃあ先ずは謝ろうよ』

「・・・そうだね・・・羽原さん、気付かせてくれてありがとう」

タダクニは立ち上がって愛衣の部屋に向かった。

第8話『タダクニと妹』

愛衣の部屋の前・・・タダクニは静かに深呼吸をする・・・そして意を決して、扉の向こうに要る愛衣に向け声を出す。

「いっ・・・愛衣、要るんだろ？」

（兄貴？何の様だ？最近は妹としか呼ばないのに私の名前で・・・馴れ馴れしい）

何時もは自分を呼ぶ時は「妹」と呼ぶ兄タダクニが、名前の方で呼んだ事を奇妙に思った。

「返事はしなくていい、只聞いてくれ」

（何だよ？）

「ゴメン！」

（はっ？コイツまた私の下着に何かしたのか？）

タダクニの謝罪に、すぐ自分の衣類や下着に何かしたと疑うあたり、愛衣が普段タダクニを如何思っているか想像できる。

「別にまた何かしたって訳じゃない・・・この間の・・・それだけじゃないな、今までお前に迷惑かけた事、怒らせた事に、
ちゃんと謝ってなかったから・・・今になってだけど、すまないと思ってる・・・本当にゴメン」

（本当に今更なんだけど・・・）

「お前が赦さないなら別にそれでいい・・・俺が勝手に謝ってるだけだ・・・」

（赦さなくていい？じゃあ何で謝りに来たんだよ？訳が分からない）

謝りに来たのに、赦してくれないならそれでいいと言うタダクニが分からなくなる愛衣。

「俺バカで単純だから・・・またあいつ等に乗せられて色々バカやって、お前に迷惑かけるかもしれない」

（何宣告してんだよ？）

「でも・・・これからはちゃんと謝る・・・怒らせないのが一番なんだけどな」

（そりゃそうだ）

「じゃあ・・・休んでいるとこすまなかったな・・・あっ、今日の晩飯何か食いたいものあるか？」

（急に晩ご飯の話かよ・・・今まで聞きもしなかったのに・・・）

今までと違うタダクニの様子に愛衣は内心戸惑った。

中学生に上がった事からタダクニと距離をおく様になり、そこから仲が悪くなって、会話が無くなって、

タダクニが自分を怒らせる様なバカな事をする事が増えて・・・。

（でも・・・元を辿れば私から始まったのよね・・・反抗期や思春期と

かそんなので・・・）

「無いんだったら適当に作るから、文句言うなよ」

（お母さんがいない時は・・・バイトの日を除いて何時もご飯作ってくれて・・・味は拙くない、

寧ろ美味しいから文句を言った事はない、でも嫌いなものが出た時は文句言ったな・・・しょうがない・・・）

「材料何があったかな・・・」

がらっ・・・

「兄貴・・・」

愛衣が部屋から出てきてタダクニを呼ぶ。

「ん？如何した？」

「・・・豚汁・・・」

「えっ？」

「だから豚汁・・・今日ちょっと寒いから」

「あぁ分かった、他は無いか？」

「玉葱使わないなら何でも・・・」

「いい加減玉葱食べられる様になれよ」

「うるさい・・・苦手なんだからしょうがないでしょ」
「分かった分かった、じゃあ魚でも焼くか・・・出来たら呼ぶから」
「うん・・・それとさ・・・」
「ん？」
「もう怒ってないから・・・後、妹だけどさ・・・妹、妹って兄貴から呼ばれるのも何か変だから、
別に名前で呼んで良いから」
「・・・あぁ、ありがとう愛衣」
「っ・・・じゃあ私疲れてるんだから、ご飯出来るまで呼ばないでね」
「おっ・・・おぉ・・・」

それだけ言い残して愛衣は部屋に戻っていった。

「怒ってないって事は・・・赦してくれたって事かな？羽原さんに感謝しないとな」

タダクニは少し嬉しそうに台所に向かった。

「あっ！そう言えばヒデノリ達に行けないって連絡しないと」

そう言ってタダクニはヒデノリに連絡を入れるが連絡が付かない・・・そして当のヒデノリとヨシタケは・・・。

「おい・・・此処何処だよ？」

「分からん・・住所を見る限り、俺達の家の反対方向だって事は分かったが・・・」

「お前の所為だからな！お前がいきなり暴走して走り出したから迷子になっちまったじゃねえか！」

「しょうがねえだろ!!まさかあそこであの妖怪がいるとは思っても居なかったんだからな!!」

「何だよ妖怪って!?」

「俺に精神的苦痛を多大な気を使わせる妄想文学妖怪だよ!!」

「意味が分からん!!」

高校生になって初の迷子になっていた・・・。

閑話『タダクニと出会って』

「タダクニ君か・・・何か変わった男の子だったな・・・私に怯えないなんて・・・」

家に着いた羽原は部屋で1人、今日会ったタダクニの事を考えていた。

自分を前に・・・羽原と聞いて脅えない不思議な男子。

羽原は今は大人しい雰囲気だが、小学生の時は名の知れたレベル程度でない、同学年か歳の近い男子から恐れられる女の子だった。

他を寄せ付けない力と、相手が倒れるまで手と止めない残虐性から「谷田東小のアークデーモン」と恐れられるいじめっ子だった。

その被害者は数知れず、トラウマを植え付けられた歳の近い男子高校生は今でも彼女を恐れている。

「何処からか転校して来たのかな?だったら私の事知らなくても不思議じゃないね」

今でも羽原は・・何故当時そんな事をしたのか、本人もよく分かっていない・・・いや、思い出したくないのだ。

当時の自分がしてきた非道とも言える暴力の数々・・・中には消えない傷を負わせた者も居る・・・隣に住む同い年の男子等・・・。

「如何してあんな事したんだろう?本当に・・・何で・・・」

次第に羽原の声が泣き声へと変わっていき、目に涙を浮かべて謝罪の言葉を何度も呟いた。

「ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・あんな事してごめんなさい・・・怪我させてごめんなさい・・・」

あの時・・・タダクニに言った言葉は、本当は自分に向けてのものだったのかもしれない。

「・・・タダクニ君も・・・昔の私を知ったら怖がるのかな？皆と同じで・・・脅えちゃうのかな・・・それとも・・・」

羽原はそこまで言うと、強烈な眠気に襲われた・・・まるで自我を保つ為に、それ以上考えさせない様にするかのように・・・。

一種の防衛本能か、羽原はそのまま兄が起こしに来るまで眠りにつくのだった・・・。

その眠りの中で・・・羽原は夢を見た。

今の自分にとっては悪夢と言えよう昔の自分の夢を・・・。

夢の中の自分は1人の男の子をいじめていた・・・泣こうが喚こうが自分は手を止めないで笑っていた。

あの頃の自分にはありきたりな光景・・・だが・・・。

『止めろ!!』

そこに仮面を付けた少年が現れた。

仮面を付けた少年は輪ゴムを飛ばし、羽原が怯んだところでいじめていた子供を助け、そこから羽原と少年の一騎打ちが始まった。

結果で言えば羽原の圧勝・・・例えるならゼ〇トンと初代ウ〇トラマンとの戦い。

だが倒された仮面の少年は、何度も立ち上がろうとし、去ろうとする羽原に叫んだ。

『絶対君を止めて見せる!!』

そこで羽原は兄に起こされ目を覚ました・・・。

「今の夢・・・とても懐かしい・・・あの時の子・・・何て名前だったかな・・・?」

その夢は何を意味し、何を表すのか・・・羽原自身も知らない・・・。

第9話『タダクニの女装姿』

「死ねえええええっ!!」

ドグオッ!!

「「ぐぼほおおおおおおおおおおおっ!!」」

開始早々物騒なタダクニの妹こと愛衣の台詞と、愛衣によって蹴り飛ばされたヒデノリとヨシタケの断末魔の叫び（死んではいない）で始まった今回のお話。

何故この様な事になったか超簡単に説明すると。

昨日何故西高に行ったかタダクニを問質す2人→タダクニ黙秘する→教えろよと攻め寄る2人→抵抗するタダクニ→その際何故か気絶したタダクニ→如何するか悩む2人→以前の女装が面白かったので愛衣の衣服拝借→タダクニお着替え→完成→愛衣帰宅→見つかる→今ここ・・・である。

「「すんませんでしたあああああああああああっ!!」」

慌ててタダクニの家から退散するヒデノリとヨシタケ。

「まったく!あのバカ共ときたら!!それに・・・」

怒りと呆れが入り混じった感情のまま、女装姿で気絶している実の兄を見下ろす愛衣。

「前もそんな事されたのに、今でもあんなバカ共と縁を切らないアン

タの気がしれないわ・・・それともあいつ等以外の友達いないの？」

笑って許せるほど懐が広いのか、それとも彼等以外友達がいないのか・・・愛衣はタダクニの心境や交友関係に疑問を持つ。

「・・・しかし・・・」

「・・・・・・・・・・・・」

「何で男のくせに女物の服が似合うのよアンタは？」

眠る様に気絶している女装したタダクニの姿をまじまじと見つめる愛衣。

以前はまだ途中の段階で乱入し、2人に乗せられて自ら愛衣の下着を身に付けようとするタダクニを見て、怒りに任せて先程の様に蹴り飛ばした。

だが今回状況から見て気絶しているところをあの2人が無理やり着せたと分かり、それと昨日の謝罪があってか、

タダクニに対して怒りは湧いてこなかった。

（他の男の子の体なんて見た事ないから分からないけど、毛が薄いわね・・・それに肌も白いし理想的（女性的に）な肉付きと細さ、

私の服も無理に着ている感じじゃないし・・・コイツ本当に男か!?）

だが別の意味で怒りが込み上げてくる愛衣であった。

（それに・・・）

「うぅ・・・ん・・・」

（何でそんなに色っぽい顔しているのよ!?）

女物の服を着ているからか？もしくは素が良いからか？あるいはそのどちらも兼ね備えているか・・・見慣れたタダクニの顔が女の子の顔に見えてしまう。

（男のくせに・・・あのバカ共の言うとおり、男性ホルモン仕事しないで女性ホルモンが重労働してんじゃないわよね!?）

「ん・・・すぅ・・・・・・」

「・・・髪留めとか付けたらもっとよくなりそう・・・スカートもミニにして・・・後お化粧とかも・・・って！

私まで何言ってんだ!?これじゃあ私まであのバカ共と同じみたいじゃないか!!」

見つめている内にタダクニに似合う服装を、脳内でコーディネートする愛衣。

それではまるで先程蹴とばしたヒデノリとヨシタケと同じではないかと思わず叫んでしまう。

「うぅ・・・何だ？愛衣？」

「はっ!?」

声に反応してか、突如目を覚ますタダクニに慌てる愛衣。

別に彼女に非は無いので慌てる必要はないのだが、先程まで女装したタダクニを脳内でコーディネートしていた故に、

変な後ろめたさや罪悪感的な何か、そしてそれがヒデノリとヨシタケと同じであると察してしまった自分に自己嫌悪で少々焦ってしまった。

「どうしt・・・って何だこれ？」

目が覚めたばかりのタダクニは、自分がまた女装させられていた事に気付き驚いた。

「アンタまたあのバカ2人に私の服着せられたのよ」

「はっ！そう言えばヒデノリとヨシタケは？」

「私が蹴飛ばして慌てて帰って行った」

「まったくもう・・・あっ・・・」

「何よ？」

「・・・ゴメンな愛衣・・・昨日謝ったのに、次の日にこれじゃあ・・・」

「・・・別に怒ってないわよ」

愛衣の意外な言葉に驚くタダクニ。

「えっ？でも・・・」

「兄貴気絶してたんだもの・・・しょうがないわよ」

「いや・・・でもだな・・・」

「もし私が怒りを覚えるとしたら・・・」

ムニ・・・

「へっ!?」

突如愛衣がタダクニの腰まわりを直に触り出す。

「兄貴のこの体よ!!」

「おおおおい！愛衣!?何処触ってんだ!?」

「うわっ!?何よこの肌すべすべじゃないの!?一体如何やったらこんな体になるのよ教えなさいよ！」

「あっ・・・やめひゃはは！くすぐったいからやめ・・はははっ!!」

「止めてほしかったら、何をしてるか教えなさい！もしくは今日の晩御飯私の好きなおかずにしなさいよ！」

「分かった！分かった！ははははっ！お前の好きなハンバーグ作ってやるからやめ・・・だはははっ！」

「・・・よろしい・・・素直に聞いてくれたご褒美に・・・もっとくすぐってやろう！」

「ってそれご褒美でも何でもない！只の拷問!!」

「彼女も居ないどころか、女の子と接する事が出来ない男子校に通う可哀想な兄貴に、美少女の私が触ってあげてるんだから十分ご褒美でしょ？」

「自分で美少女言うな！」

「あ～～～そんな事言うんだ・・・もっとくすぐってやる！」

「ははははははっ！ごめん！ごめん！謝るから赦して！」

「だ～～～めっ!!」

「だはははははははははははははっ!!」

普段の2人・・・いや、昨日以前の2人からしたら仲睦ましき過ぎる光景であるが、これが本来の2人の・・・この姉妹の姿なのかもしれない。

「姉妹って何だ!?俺は男だ!!」

すみません・・・しかし今の君の姿を見たらそうとしか見えません。

「ちっくしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!だはははははははははははははっ!!」

「何訳分からない独り言を言ってんのよ?笑い過ぎて脳が逝っちゃった?」

「そう思うんならやめろよ！」

「いや！面白いからもう少しやる！」

「ちょっまっ・・・・あはははははははははははっ!!本当に勘弁・・・ひゃはははははははははっ!!」

本当・・・仲良くなったね・・・・。

第１０話『タダクニが居ない教室』

タダクニが西高へ行ってから2日後の放課後。

「あれ？タダクニは？」

「タダクニなら買い物あるって先に帰ったぜ」

「何だよ・・・今日こそ西高に何しに行ったか聞きだそうとしたのによ・・・」

気になるのは仕方がないが、如何しても聞きたい様子のヨシタケ。

「如何した？」

「タダクニが如何かしたのか？」

「あぁ・・・唐沢にミツオ君」

そこにミツオ君と唐沢がやって来た。

「実は2日前にタダクニの奴が西高にいｔ「ウヴォエエエエエエエエエエェェ

「唐沢が吐いたあああああああああああああああああああああああっ!?」

突如として普段クールな唐沢が盛大に嘔吐しだして、場は大混乱になった。

「唐沢あああああぁぁぁぁぁぁぁ!!幾ら俺やヨシタケに生徒会長と異常の眼鏡の声がアレだからってお前が吐く必要ないんだぞ!!
って言うかそれだったらお前はブリーフ一丁になるｎ「お前はメタな発言止めろ!!」」

「つうか言ってる意味が分かりませんぜ旦那ぁ～～～」

「お前完全に理解してやってるだろが!!」

「俺は生徒会長じゃない・・・居る意味ない奴だ」

「生徒会長まで来た!?ってそんな悲しい事言うなよ!!」

「いやだって、作者が俺の名前まだ考えてないからさ、何なら金髪の方が良かったかな?髪関係だし」

「・・・話が進まないので帰ってもらえませんか?」

取り敢えずは混乱は治まり、唐沢を落ち着かせる為に座らせた。

「・・・すまない」

「しかしいきなり如何したんだよ?」

「普段のお前らしくないぞいきなり吐くなんて」

「すまない・・・まさかここで西高の話を聞くとは思わなかったからな・・・」

「何だよそれ?」

「西高には・・・俺にトラウマを与えた元凶が居るんだ・・・普段ならある程度抑えられるんだが、
いきなりだったもんでついな・・・」
「本人じゃなくて、そいつが通っている学校を聞いただけで嘔吐するってどんだけ強烈なトラウマだよ？」
「分かる・・・分かるぞ～～～唐沢」
「ヒデノリ？」
ヒデノリは唐沢の隣に腰掛けて肩に腕を回して頷く。
「俺もさ・・・お前の様に嘔吐はしないけど、俺の精神に別の意味で軽いトラウマ植え付けた妖怪が要るのよ」
「前も言ってたけど・・・妖怪って何だよ？」
「っで・・・タダクニが何をしに西高に行ったのかこの目で見る為に、意を決して西高に突撃したらさ、
その妖怪が要るじゃありませんか！俺は咄嗟に恥も外聞もなくUターンして叫びながら逃げ出してしまったわけですよ」
「いいいやあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!って叫びながら逃げたなお前」
「お前も辛い目に合ったんだな・・・」
「つい最近だがな・・・」

「ヒデノリ・・・」

「唐沢・・・」

2人の間に変な空気が流れておりますが、ご安心を・・・そっち方面には走らしませんから。

「あのさ・・・話題逸れているんだけど・・・タダクニの話じゃなかったけ？」

「あっ！そうだった」

「忘れるなよ・・・」

「でも確かに気になるな・・・小中の頃の友達が居て会いに行ったとか？」

「だったら別に中に入らなくても良いと思うけどな・・・」

「殴り込みか？」

「それは無いな、アイツは自分から喧嘩を吹っ掛ける様な奴じゃないし？確かに喧嘩は強かったけど」

「えっ？何？ミツオ君もタダクニが喧嘩強いって事知ってんの？」

「ミツオ君も同じ小学校に通っていたからな」

「後このクラスならモトハルとコージも同じ小学校に通っていたよな」

「へえ・・・それより意外だな、タダクニが喧嘩が強いなんて」

小学生時代のタダクニを知らない唐沢も、驚いている様子だ。

それ程普段のタダクニからは想像できない事らしい。

「でも流石にアイツには勝てなかったんだよな」

「結構粘ったみたいだけどな・・・」

「何？お前等が強い強い言ってるタダクニが負けた相手が居るのかよ？」

「まあな・・・お前等も聞いた事あると思うけど・・・」

「最凶最悪、悪逆非道のいじめっ子、谷田東小のあーくでーm「ブヴォレベエエエエエエエエエエエエエッ」ってぎゃあああああああっ!?」

「唐沢がまた吐いたあああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!」

「うおおおおおおっ!?唐沢の吐瀉物がズボンに!!」

再び唐沢が嘔吐した事により再び教室は大混乱に陥った。

その頃、タダクニは・・・。

「・・・今何だか教室でとんでもない事になっている気が・・・」

スーパーで買い物をしていたタダクニは、教室の騒ぎを何気なく察

知していた。

「まあ何時もの事か・・・さて、明日はバイトだし、作り置きが出来るカレーにするか」

「あれ？タダクニ君？」

「へっ？」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこにはタダクニの想い人、羽原が立っていた。

第11話『タダクニとスーパーで』

「羽原さん！」

「偶然だねこんな所で」

意外な場所で羽原と出会い、内心大喜びのタダクニ。

「そうだね・・・羽原さんは買い物？」

「うん、タダクニ君もお買い物？」

「はい・・・あっ！羽原さん、ありがとう」

「えっ？」

突如タダクニに礼を言われて戸惑う羽原。

「羽原さんのおかげで、妹との仲が少しだけ良くなったよ・・・ありがとう」

「そんな・・・私は只お節介を・・・少し背中を押しただけだよ・・・」

「でもそのおかげで俺は妹に謝る踏ん切りと、気持ちに気付いたんだ、だからありがとう」

「タダクニ君・・・うん、私なんかが役に立てて良かった・・・妹さんと仲良くなって、良かったね」

「まだほんの少しだけどね・・・」

「でも良い事だよ・・・あっ！ゴメンねお買い物中だったのに呼び止めちゃって」

「いえ、大丈夫ですよ・・・買う物も決まっていますからすぐに終わるし、羽原さんが気にしなくても大丈夫ですよ」

中断していた買い物を再開する為、２人は並んで歩いた。

「何を買うの？」

「作り置きが出来るカレーを、俺の家両親が共働きだから、居ない時は俺が作ってるんです」

「へえ～～～タダクニ君、料理が出来るんだ」

「うん、中学の時から始めたから、腕前はそれなりに自信あるかな」

「いいな～～～私も時々お料理するんだけど、あまり自信ないな」

料理に自信無い事を悩む羽原の姿に、普段彼女が如何したら出来るとか、スカートって如何思う？

乳首に毛がとか、エロ本が親に見つかった等と下らなくもありきたりな会話をしたり聞いたりのタダクニには新鮮な感じだった。

（いや～～～女子の悩みってむさっ苦しさや下らなさが無いな・・・何と言うか可愛らしい・・・）

「タダクニ君？」

「あっ！その・・・料理は数ですよ！数を熟していけば上手くなってい

きますって」

「そうかな？だと良いけど・・・」

「誰だって最初は下手ですよ。俺も最初は何回も失敗しましたし」

失敗した時の苦い思い出を思い出して苦笑いになるタダクニ。

美味いと言われると嬉しく、不味いと言われると申し訳なく、そんな気持ちになる。

でもどっちで言われても、いつも思う事は１つ。

「もっと美味しく出来ないかって思っちゃうんですよね」

「美味しいって言われても？」

「はい、だってそうなればもっと喜ばれますから」

タダクニはそう笑顔で答える。

羽原はその笑顔に心なしか惹かれた。

（タダクニ君って優しく笑えるんだ・・・何だか安心する笑顔だな、私が笑ったら大概の人なんて・・・）

「羽原さん？」

「えっ？何？如何したの？」

「いえ・・・俺の買い物は終りましたけど、羽原さんの買い物は大丈夫

ですか？」

「あっ！えっと・・うん、あと1つだから大丈夫だよ。先に行って待ってて」

「はっ・・・はい・・・」

タダクニは言われるままに先にレジへと向い、先程の羽原の言葉の意味を考えていた。

（「待ってて」って事は、一緒に帰ろうって事か？いや・・・落ち着けタダクニ、可能性は0ではないけど、
違っていた時の落胆は大きいぞ・・・）

タダクニは違っていた時の事を考えて、はやる気持ちを抑えながらレジを通った。

レジを通った後、羽原に言われた通り、出入り口付近で待つタダクニ。

「お待たせタダクニ君」

「いえ・・・そんなに時間掛かってませんから」

「じゃあ帰ろっか」

（一緒に帰ろうだったあああああああああああああっ!!いやっほううううううういやああああああああああああっ!!）

まさか本当に一緒に帰るとはと、タダクニは心の中で盛大に喜び発

狂した。

そして一緒に帰る事になったタダクニは、羽原と其々の買い物袋を持って並んで歩いた。

「タダクニ君・・・もし良かったら、私にお料理を教えてもらえないかな？」

「えっ!?」

羽原の予想外の言葉に暫し呆然とするタダクニ。

「その・・・ねっ、お母さんに教わるのも良いんだけど、他の人から教えてもらったら早く上達するかもって・・・駄目？」

ズギャーーーーーーーンッ!!

（そっ・・・そんな上目使いでお願いされて断れるわけが無いですよ!!）

「・・・タダクニ君？やっぱり迷惑・・・かな？」

「いえっ!!そんな事は無いです!!何時でも言ってくれたらお教えします!!」

「あっ・・・ありがとう・・・あっ、じゃあお互い連絡先交換しない？」

「えっ!?良いんですか？（まさか羽原さんから連絡先を教えてくれるなんて・・・）」

「うん？だって私達もうお友達でしょ？」

「は・・・はい・・・・(・・・・お友達・・・・)」

羽原のお友達と言う言葉に、タダクニは嬉しい様な悲しい様な心境になった。

(まっ・・・まあ、会ってまだ2回目で恋人は無いよな・・・それに、友達って事はそこまで好かれてなくても、
逆に嫌われてはいないって事だ・・・そこから発展するかは俺しだい)

何時もネガティブに物事を考えがちなタダクニではあるが、今回はポジティブに前向きな姿勢で現状に向き合ったようだ。

どうやら羽原との出会いは、タダクニの内面にも良い影響を与えた様だ。

タダクニと羽原はお互いの連絡先を交換し合い、再び歩き始めた。

「・・・あれって・・・兄貴?・・・・・・隣にいる女の人は・・・・誰?」

その様子を妹が見ていた事に気付かずに・・・・。

第12話『タダクニと妹の食事』

「さてと・・・今から初めて、出来上がるのは7時頃かな？」

家に着いたタダクニは早速カレーを作る準備を始めた。

（それにしても今日は良い日だ・・・羽原さんから連絡先を教えてくれたし、恋人・・・とは流石にいかなかったけど、

友達になれた・・・でも何時かは・・・）

おい・・・妄想するのは勝手だが、気を付けないと手を切るぞ。

さく・・・

「痛っ！」

ほら見ろ・・・言わんこっちゃない。

「・・・ただいま」

「（あれ？メイが帰って来た？今日は早いな・・・）おかえりー」

メイが帰って来て返事を返すタダクニ。

メイはその返事に反応する・・・と言うよりタダクニの声に反応して台所にやって来た。

「・・・あのさ・・・兄貴」

「・・・何だ？」

何時もと明らかに様子の違うメイ。

それにタダクニは気付いたが、そんな時に変に如何したと聞けば怒らせてしまうと、仲が悪かった時に経験していたので、あえてそこは聞かずに質問を待つ。

「その・・・き・・・今日の晩御飯何？」

「明日バイトで居ないからカレーだよ」

「そっか・・・じゃあ私勉強しているから、出来たら教えてね」

「おう・・・」

そう言って自分の部屋に行くメイを少し心配げに見つめるタダクニ。

「学校で何かあったのかな?それか俺に何か言いたかったか・・・でも変に深追いすると怒らせるだけだしな・・・」

女心は踏み込み方を間違えたら怒らせるだけなのは、４年近く仲が悪かった間でよく理解していた。

それでも怒らせてきたのは、単にタダクニがバカだからと、ヒデノリとヨシタケのバカに乗せられたからだろう・・・がっ、乗せられてしまうあたり、やはりバカなのであろう。

「何にしても俺にできる事なんてあるのかね?」

カレーを作りながらもメイの事を気にかけるタダクニ。

そんな中、ふとある事を思い出す・・・。

「そう言えば・・・俺が作った料理で、アイツが初めて美味しいって言ってくれたのって、カレーだったな」

当時小学校高学年のメイが、タダクニに気を使わないで、正直に美味しいと言ってくれたのがカレーだった。

『お兄ちゃんのカレー、美味しい！』

(あの時の言葉が、笑顔が嬉しくて、料理をもっと上手く出来る様に頑張ったんだよな)

懐かしい思い出に自然と表情が緩む。

「・・・何があったかは分からないけど、美味いカレーを食わせて、その間だけ忘れさせてやるか」

タダクニは今できる限り、最高に美味いカレーを作り始めた。

それから予想通り7時頃にカレーは出来上がり、タダクニはメイを呼んだ。

「メイ！カレー出来たぞ！」

「・・・今行く・・・」

メイが来るまでの間に、テーブルにカレーとサラダ、食器を置いていくタダクニ。

メイが台所に着いた時には丁度食べられる準備が終った。

「じゃあ・・・」

「いただきます」

メイはカレーを口に運び、タダクニはメイの反応を待った。

「・・・美味しい」

「そうか、何時もと味付け変えたけど如何だ？」

「うん・・・今までで一番美味しい・・・今までも美味しかったけど」

「そうか、ありがとうメイ」

「ん・・・・・・」

タダクニは微笑んで礼を言った。

メイは咄嗟にタダクニから視線を外した・・・タダクニの微笑みに思わず顔を赤らめ、それを気付かれまいとした。

「・・・兄貴・・・」

「何だ？」

「・・・バイトってどうなの？」

「どうってなあ・・・大変だけどそれなりに楽しいかな？」

「ピザの配達だよね？」
「あぁ、興味あるのか？」
「・・・まあね」
タダクニは察した、本当は違う事を聞きたいが、それが何故か出来ないでいると。
「そうか・・・でも女の子は調理の方に回されるしな」
「別にやってみたいって訳じゃ・・・部活もあるし」
「そうだよな・・・部活どうなんだよ？ラクロス」
「楽しいよ・・・部長もこのままいったらレギュラーになれるかもって言ってくれてるし」
「凄いじゃないか、まだ1年で」
「でも流石に今年の試合はね・・・先輩の顔もあるし」
「そこは何処も変わらないな」
「兄貴は部活してないよね？」
「何を言う、手芸部と言う名の帰宅部に所属してるぞ」
「それはしてるとは言わない」
「あっやっぱり？」

「そうだよ」

メイとこんなに言葉を交わして、楽しいと思った食事は久し振りだろうか？タダクニはそう思っていた。

出来ればメイから本当は如何したのか聞きたいが、今はそのタイミングではないと、聞こうとはしないでいた。

そしてそのまま食事は終った。

閑話『タダクニの彼女なの？』

今日は部活が休みで、友達と一緒に下校していたメイ。

途中寄り道して談笑して等、下校中の一時を楽しんでいる時、メイは意外な光景を見てしまった・・・。

「・・・あれって・・・兄貴？・・・・・・・隣にいる女の人は・・・誰？」

自分の兄タダクニが、自分の知らない女子高生と楽しそうに歩いている光景を・・・。

「如何したのめーちゃん？」

「えっ⁉いや・・・何でもないよ・・・」

少し呆然としていたのか、友達の1人が心配になってメイに声を掛けた。

声を掛けられて自分が呆然としていた事に気付いたメイ、友達は心配になってメイに問いかけるが、

言える訳が無い・・・兄が見知らぬ女子高生と一緒に歩いていることを見てびっくりしてしまった等と・・・。

(たっ・・・確かに驚いたけど・・・別に兄貴が誰と付き合おうと私には関係ないし・・・それに変に誤解されて、

ブラコンなんて思われるのは嫌だし・・・って！まだ兄貴が付き合っているって決まった訳じゃないし・・・って！

だから別に付き合おうと関係無い・・・でも・・・あぁ・・・もうっ

!!何なのよ!?）

心の中で色々と問答しているメイ。

「めーちゃん？」

「大丈夫？気分でも悪い？」

「えっ!?うぅん・・・大丈夫だよ」

「・・・ねえ、今日はもう帰ろうか？」

「うん・・・そうだね。めーちゃん、また明日ね」

「うん・・・ばいばい・・・」

その明らかに様子が少し変なメイを気づかい、今日は早々と解散する事にした。

友達と別れ、家に着くまでの間、メイの足取りは若干重かった。

（あの女の人・・・兄貴の友達かな？それとも・・・）

普段は頼りがいの無い、バカな事しかしない、友達が修復不可能なバカしかいない、女装が異様に似合う兄タダクニ・・・。

しかし・・・何時も美味しいご飯を作ってくれて、何かと気にかけてくれていて優しい兄タダクニ。

つい最近まで仲が悪かったメイとタダクニ、それまでは前者の悪いイメージしか抱いてなかった、

でもタダクニの謝罪以降、後者のタダクニの良いイメージを知る・・・いや、思い出したのだ、
幼い頃自分が兄に抱いたイメージと心境を・・・。
それがメイの心をかき乱している事を、本人は知らない・・・。

「・・・ただいま」

「おかえりー」

家に着くと既に帰宅していたタダクニ。

「・・・あのさ・・・兄貴」

「何だ？」

「その・・・き・・・今日の晩御飯何？」

本当は別の事を聞きたかった、今日一緒に居た女子高生の事を・・・
しかし、望まない答えに恐れ、
咄嗟に質問を変えてしまった。

「明日バイトで居ないからカレーだよ」

「そっか・・・じゃあ私勉強しているから、出来たら教えてね」

「おう・・・」

メイは自分の部屋へと向かった・・・その途中・・・。

「・・・あの女の人って・・・兄貴の彼女・・・なのかな？」

そう呟くメイは、悲しみと寂しさが入り混じった表情になっていた事を・・・本人も気付いていなかった。

第13話『タダクニとメタ発言』

「タダクニ・・・今日こそは聞かせてもらうぞ」

「お前が西高に行った理由、洗いざらい吐いてもらおうか?」

(くっ・・・まさかあの時つけられていたなんてな・・・もう一週間近くも前の事なのにしつこいなコイツ等)

タダクニは自分の家の、自分の部屋でヒデノリとヨシタケに、西高に言った事について詰め寄られていた。

何でこうなる事を予想が出来たのに家に上げるのか・・・それにしても本当にしつこいなコイツ等。

「逃げ場はないよ〜〜〜タダクニく〜〜〜ん」

「さっさと吐いちゃいなよ・・・楽になるよ〜〜〜?」

(くっ・・・羽原さんの事を隠して言うのは簡単だ・・・しかしそれだけでコイツ等が納得する筈がない・・・。)

タダクニが警戒しているのはこの2人のしつこさ。

納得がいかない、ふざける時に思った通りに行きそうにない場合のしつこさは、その被害にあった貧乏くじ係のタダクニがよく知っている。

(しかし・・・ここでこうも詰め寄られるのもキツイ・・・危険だが生徒手帳を届けた事だけ言うか・・・)

この状況を少しでも打開する切っ掛けを作る為、あえて少しだけ話すタダクニ。

しかしこれはタダクニも思った通り、危険な賭けでもある。

運が良ければこれで片が着くが、そこからドリルで穴を開けるかの如く、真実を聞き出そうとする方が確率は高い。

しかしこのままでは何れ全てを話してしまう・・・故に少しでも状況の改善を狙い話すのだった。

「成程・・・生徒手帳をね・・・」

「それなら何で俺等にひた隠しするんだよ？」

「その場でお前等に教えたら、相手のプライバシーとか関係無しに中身を見ようとするだろ」

「失敬な！」

「俺等にもやって良い事と悪い事の区別位出来るわ！」

「じゃあ俺にスカート履かせるってどういう事だよ！」

「いや～～～だってそれはさ・・・なあ？」

「もはやそれがお前の宿命と言うかデスティニー・・・」

「スカート履く事が!?俺の運命？スカート履く事で意味を成すの!?」

「運命じゃないデスティニーだ！じゃないと某フリーダムガンボーイを連想させにくいだろうが！」

「何の話だよ⁉つうかメタな発言は止めろよ！」

「そんな・・・少しでも思い出してもらおうとしてるだけなのに・・・あんたって・・・あんたって人はあああああああああっ‼」

「どんだけ種死ネタを放りこむ気だよ⁉」

「ぎゃーぎゃー騒がしいぞタダクニ、発情期ですか？この野郎」

「お前もネタに走るなよ‼」

「しょうがねえだろ？この状況と空気で、こうでもしないと俺の中の何かが目覚め・・・めざ・・め・・・ウエイク・アップ‼しちまうんだからよ！」

「お前もう既に目覚めてるよ‼」

「タダクニ、ツッコむだけじゃなくてお前も何かネタやれよ・・・答えは聞いてない！」

「サン〇イズとラ〇ダーネタはもういいわ‼」

「だったらタダクニも何かネタ言えよ」

「そうそう・・・ヨシタケの言う通り、ツッコむだけじゃ疲れるから、気晴らしにネタの１つでも言っちまえって」

「・・・・・・・・・」

「如何した？タダクニ？」

「黙り込んで如何した？」

「・・・メタな発言になるけどな・・・」

「「うん？」」

「この作者に・・・俺の中の人ネタでボケを入れられる知識とスキル！そして何よりもネタが無い!!」

「「はっ！すんませんでしたあああああああああああああああああっ!!」」

取り敢えず・・・話題を逸らす事には成功した様です・・・タダクニ・・・ゴメン。

第１４話『タダクニと乱入』

「さてタダクニ、話はそれたが、その届けた生徒手帳の持ち主はズバリ！男ｏｒ女？」

（やはりそうきたか・・・さてどう切り抜けるか・・・）

話題をそらせたが、やはりすぐに元の鞘に収まった。

「俺は女だと思う、日頃彼女が欲しい欲しいと言っていたお前が無償で行くはずがない」

「お前俺を飢えた獣か何かと勘違いしてないか？」

「いやいやタダクニ君、お前や俺達も含め男子高校生は皆飢えた獣なのよ」

「腹を満たすには彼女を作るしかない」

「まあ・・・作りたい気持ちは分かるけど・・・」

その気持ちにタダクニは同意、特にここ最近、羽原に出会い、そして惚れてしまった今現在、

付き合いたい対象がいなかった時と違い一人に絞られて事によりその気持ちは一層強くなっているのだ。

「でもそれと男か女かを聞くのと如何関係あるんだよ？」

「タダクニ・・・お前もしミツオ君に彼女が出来るかもしれないと聞いたら・・・如何する？」

「・・・えっ？」

「ミツオ君じゃなくてコージや唐沢にモトハルでもいい・・・お前に彼女が居ないのに、他のバカ共に彼女が出来るかもしれない！」

「バカ共って・・・まあ、正直嫉妬はするな・・・」

事実タダクニ自身、羽原と出会う前にミツオにラブコメイベント発生を阻止しようと思ったので、否定できない。

「だろ？そうだろ？となるとそれを断固阻止したくなるだろ？」

「まあ・・・そりゃあ・・・」

ヒデノリの言葉に、先程内心で否定できないと思っているのでつい同意してしまう・・・しかし、同時にある事に気が付く。

「ん？それってつまり、俺に彼女が出来るかもしれないから、阻止しようとしてるって事か？」

「「ギクッ！」」

いや「ギクッ」って・・・そりゃバレるだろう・・・。

何時もならタダクニに気付かせる事なく上手く乗せられるのだが、内心焦っているのか何時もの様にいかなかった様だ。

「ふざけんなよ！気持ちは分からんでもないけど友達だろお前等!!」

「うるせえ!!それとこれとは話は別だ!!」

「さっきお前だって阻止したいって同意したじゃねえか!!」

「当たり前だ!!っていうのもなんか人として如何かと思うが・・・」

「奥様聞きました？高木さんとこのタダクニ君、自分の事を棚に上げてお友達を非難するらしいざますよ？」

「聞きましたわ！最近の男子高校生って、上辺だけの付き合いなのかしら？」

「お前等に言われたくないわ!!」

後ろめたさから若干引き下がるタダクニ、しかしヒデノリとヨシタケのざますコントにイラッときて勢いを取り戻す。

「お前等、今は組んでるが、お前等のどちらかが今の俺と同じ状況になったら邪魔されるって事分かってんのか？」

「当たり前だ！」

「俺より先に幸せにさせてたまるか！」

「潔いなお前等!?」

あっさりと裏切り宣言をするヒデノリとヨシタケ。

ここまではっきり言われたら逆に清々しいとまで思えてくる。

「つうかタダクニ君よぉ・・・今お前、「俺と同じ状況になったら」って言ったよな？」

「あ？あぁ・・・それが如何した？」

「それってつまりは、俺達が邪魔する動機、彼女が出来るかもしれないって事を認めたって事で良いんだよなあ？」

「はっ!?」

しまったと動揺するタダクニ、訂正の言葉を放つ前にヒデノリとヨシタケが畳み込もうと攻める。

「タダクニ君・・・隠し事は止めようや・・・」

「俺達友達じゃん」

「今この状況を見てお前等を友達と呼べる要素は無い！」

「まあまあ・・・それより実際どうなの？お前の一方的な片思い？それとも向こうからのアプローチ？」

「返答しだいじゃ対応も変わるからな」

「お前等・・・怖いよ・・・」

ガチだ・・・本気だ・・・マジだ・・・タダクニは本能で察した。

今の2人はタダクニに先を越されるかもしれない事態に焦って目が血走っていた。

これは何時ものおふざけ程度では終わらない・・・そう分かってはいるが、何時まで耐えられるか・・・。

ドンッ!!

「「!?」」

しかし突如部屋のふすまが開けられ、3人の視線がふすまの先に集中した。

そこに立っていたのは・・・・。

「・・・どうした?続けろ・・・・」

「めっ・・・・妹?」

魔王・・・・タダクニの妹・・・・メイだった。

第15話『タダクニと乱入2』

「・・・どうした？続けろ・・・」

「めっ・・・妹？」

突如としてタダクニの部屋に入って来たメイ。

場は静まり返り、自分の心音と、メイの足音しか聞こえない。

（おい！何で妹が来るんだよ？）

（知らねえよ！お前また妹の服に手を出したんじゃないの？）

（今回はやってないし、等価交換でパンツも置いてない！）

（じゃあ何で妹が入って来るんだよ!?）

（さっきも言ったけど知るか！お前こそ妹の下着でも盗んだんじゃないのか？）

（今回はしてねえよ！）

（今回はって、以前やった事あんのかよ!?）

メイの乱入とも言える行動は、2人にとっても予想外の事で、その原因について小声で話し合っていたが・・・犯罪だからね・・・それ。

「いっ・・・妹、どうしたんだよ？急に？」

「・・・・・・別に、只部屋が寒かったから来ただけ」

「あの・・・でしたら暖房を入れたら・・・」

「電気代が勿体ない」

「・・・そうですか」

「あ・・・でも俺達今取り込んでいまして・・・」

「言ったろ？続けろって・・・」

「いや・・・でも・・・」

「聞くに堪えない、見るに堪えない下らない内容だったら勝手に出て行く・・・続けろ」

「はっ・・・はぁ・・・」

ヒデノリとヨシタケは何時になく丁寧な、それでいて何時もの様な口調で愛衣に話しかける。

当然だ、メイの体から迸るオーラと言うか雰囲気が・・・明らかに不機嫌であると分かるからだ。

しかも、スカートや衣服を拝借した時、下着を盗んだ時、このどちらをした時以上の不機嫌さ、２人がビビるのは仕方がない。

（おい！何で妹の奴、こんなに不機嫌なんだ？）

（何度も言うけど知らねえよ！）

（神に誓って言うけど俺は何もしてねえぞ！）

（俺だってそうだ！）

「なあ・・・妹、俺達何かしたか？勿論俺は何かした覚えはないけど・・・」

「・・・・・・・・・」

（無視ですか・・・相変わらずの兄妹仲な事で・・・）

（質問はナイスだと思うけど、普段のこいつ等見てると火に油を注ぐようなものだぞ）

タダクニとメイの兄妹仲が悪い事を知っている2人は、この光景を当たり前と見ていた・・・しかし、どこか違和感があると感じ始めた。

（なあ・・・何時もなら被害者であってもタダクニに真っ先に暴行する妹が何もしないぞ）

（あぁ・・・今気付いた、正直さっきみたいに騒いでいたら、真っ先にタダクニに襲い掛かる筈なのに・・・）

そう、何時もなら真っ先にタダクニに鉄拳や蹴り、更には関節技と言った制裁を与える筈なのに、一向にそんな傾向が見られないのだ。

それもその筈、2人はタダクニとメイの仲が良くなった事を知らないのだから・・・それと、それがメイを不機嫌にさせている原因の1つだと言う事も・・・。

「おっ・・・俺達そろそろ帰るわ・・・ヨシタケはまだ残るみたいだけ

ど・・・」

「えっ!?何それ!?」

突如のヒデノリからの、ヨシタケ残る発言に言われた当人は大いに焦った。

（いいからお前残れよ！そしてタダクニから真相を聞き出して俺に教えろ！）

（じゃあお前が残れよ！俺もうこの空気に耐えられないよ！）

（俺だってそうだよ！）

小声で言い争う2人。

「なあ・・・お前等」

「「はっ！はい!!」」

「帰るなら・・・帰れ・・・」

「「えっ？」」

思いもよらぬメイからの解放許可・・・しかし・・・。

「帰りたいのなら帰れよ・・・」

（（いや・・・どちらかと言うと、帰らないと殺すって目で見てるんですけど・・・））

そう・・・その目はまさに人殺しの目（前髪で見えないけど）であった。

いう事を聞かないと殺される・・・と、野生の勘がそう訴えている・・・そんなものはないが・・・。

この何故か不機嫌なメイを前に、ヒデノリとヨシタケは、帰宅を余儀なくされ、部屋には不機嫌なメイと、

先程から黙って空気と化していたタダクニだけが残された・・・。

第16話『タダクニとメイの気持ち』

ヒデノリとヨシタケが帰った後、部屋にはタダクニとメイが2人だけ残っていた。

まあここはタダクニの部屋なので居て当然なのだが・・・。

「・・・・・・・・・」

「メイ、如何かしたのか?」

沈黙に耐えきれなくなったか・・・それとも、普段と様子が違う事を心配してか、メイに話しかけるタダクニ。

おそらくは後者であろう、タダクニの声に一切の躊躇やそういったものは無かった。

「・・・呼び方」

「えっ?」

「今は戻ってるけど・・・アイツ等居た時は〝妹〟って言ってた・・・」

「あぁ・・・いや、別によかったんだけどな、急に呼び方変わったら何があったかって、またあいつ等うるさいし?
お前もとやかく聞かれるのは嫌だろ?」

「気を使ってくれたんだ・・・ありがとう・・・」

そう言うとまた黙り込んでしまったメイ。

（呼び方を戻した事に機嫌を損ねたのかと思ったけど・・・違うようだな、そもそもその前から機嫌悪そうだったし）

「ねえ・・・兄貴・・・」

「如何した？」

今度は黙り込んでいたメイの方から話しかけてきた。

その声には先程のタダクニとは違い、躊躇しているかの様な声だった。

「あのさ・・・あのバカ達と同じ質問するのも癪なんだけど・・・」

「・・・ヒデノリ達と同じ？あぁ・・・彼女が欲しいとかか？」

「ううん・・・その後・・・」

「えっ？・・・ひょっとして彼女が出来るかもしれないってくだりか？」

「・・・うん」

この時タダクニは、恋バナ好きな女の子らしい一面を見せたと思った。

それが少し愛おしく感じ、タダクニは・・・。

「本当の事言うと・・・俺の一方的な片思い中だ」

躊躇も恥ずかしげもなく素直に答えた。

「・・・それってつまり・・・好きな人ができた・・・って事？」

「あぁ・・・」

「・・・その人って・・・この間一緒に歩いてた人？」

「えっ!?」

「カレー作ってくれた日・・・」

「あ・・・見られてた？」

タダクニはしまったと思った。

別に悪い事をしたわけでも、後ろめたい事をしたわけでもない。

好きな人ができたと告げたが、誰だか分からないからと思い、恥ずかしさは無かったが、その人物を特定させられると一気に恥ずかしさが込み上げてきたのだ。

しかし、一度告げてしまったからにはもう引き戻せない、タダクニは腹を括って答える。

「そうだよ・・・西高の羽原さんって言うんだ・・・」

「届けたっていう生徒手帳の持ち主？」

「あぁ・・・その日の登校時、遅刻しそうで走っていた時にぶつかってな・・・」

「えっ!?」

「如何した？」

「そ・・・その羽原さん・・・その時食パン口にくわえてた？」

「いや・・・さすがにそこまでは・・・」

まさか少女漫画でありきたりな恋愛イベントを、自分の兄が体感してるとは思いもよらなかったメイは心底驚いた。

「そんなベタな展開にあうなんて・・・あんたは漫画の主人公か!?」

「俺も驚いたよ・・・それとメタな発言になるけど・・・一応日常ギャグ漫画の主人公です!!」

言え・・・好きなだけ叫べタダクニよ・・・君はここでも原作でも主人公だよ！

「はあ・・・それにしても兄貴が恋ねえ・・・」

「おかしいか？」

「おかしい・・・わけないか・・・兄貴も何だかんだで高2だものね・・・」

「おいおい・・・バカは多々やるけど、だからって子供じゃないぞ」

「分かってるよ・・・稔るといいね・・・兄貴の恋・・・」

「!?おっ・・・おぉ・・・」

てっきりからかわれるかと思ったが、自分の恋を応援してくれるメイに、ハトが豆鉄砲を喰らった様な顔になるタダクニ。

「じゃあ私部屋に戻るね・・・兄貴、何か進展あったら教えてね」

メイはそう言い残して部屋を出て行った。

「・・・まさか応援してくれるとは思わなかった・・・あれ？いつの間にかメイの奴機嫌がなおってた様な・・・結局なんだったんだろう？」

プルルル・・・プルルル・・・

「んっ？この番号は・・・」

携帯にかかって来た番号を見て、思わず表情が緩んだ。

その頃、部屋を出たメイは・・・。

「・・・何で？何でこんなにイラつくの？」

拳を強く握りしめて、何故か湧き出る苛立ちに戸惑い、弱弱しく呟いていた。

「別に・・・兄貴に好きな人ができたからって私には関係ないし・・・あぁ・・・でも、もし関係が進んだら私の義姉になるかも・・・」

呟けば呟く程苛立ちはつのり、疑問は増えていく。

「・・・おもしろくない・・・くやしい・・・何でこんな気持ちになるの？これじゃあまるで・・・ブラコンじゃない・・・」

果たして本当にそうなのか？

メイの苛立ちの原因はタダクニに好きな人ができたからには違いない・・・しかし、それはブラコンを拗らせた事によるものなのか？

もっと単純な・・・それでいて信じがたく認められない感情によるものなのではないか・・・それは本人にも分からない・・・。

第17話『タダクニと同伴少女』

メイの突如の乱入により真相を聞き出せずに終わった翌日の学校。

「うーす」

「オス、タダクニと一緒じゃないのか」

「えっ？アイツまだ来てねーの？ＨＲ始まる前に昨日の事聞きだそうと思ったのによ」

「俺も・・・何とかアイツが帰るまでに聞き出してやる」

今日こそは聞き出そうと意気込むヒデノリとヨシタケ。

しかしそんな2人を見ていた唐沢から、ある意味で笑えないジョークを言われる。

「お前等最近タダクニの事ばっかり気にしてるな、そのうちホモだとバレるぞ」

「「誰がホモだ！誰が!!」」

まあ事実、最近タダクニの事を気にしているので、ノリでこう言われても仕方のないヒデノリとヨシタケである。

「普通〝勘違いされる〟だろ？何で確定してんだよ!?」

「いや・・・だってお前等、前に女装して気絶してるタダクニの写メを見てニヤついていたじゃねえか」

「あれはネタだ！タダクニをからかおうとして見てただけだ！」
「じゃあ別にタダクニが来てからでもよかったんじゃないか？来る大分前から見てニヤついてて正直引いたぞ」
唐沢の冷静な返しに冷や汗を流すヒデノリとヨシタケ。
「そっ・・・そんなにニヤついてたのか？俺達？」
「今のところ俺だけが知っていると思うが、他の奴等に知られたらお前等、女にモテないから男に走ったと、
校内中噂になってもしかたが無い程のニヤケ顔だったぞ」
「マジで？」
「マジで」
「「・・・・・・・・・・」」
今更ながら結構変態チックな事をしてしまったと内心後悔するヒデノリとヨシタケであった。
「俺はお前等とは友達でいたいんだ・・・しかしおホモ達だけは勘弁してくれよ」
もうツッコむ気力も消え失せたか、2人は意気消沈の状態で黙って離れる唐沢を見ていた。
「・・・もうこれ以上タダクニ、タダクニするの止めようか・・・」

「そうだな・・・今思えば昨日のあれも只の憶測、確固たる証拠もないのに、決めつけて尋問紛いの事をするのは流石にな・・・」

「・・・タダクニに悪い事したな」

唐沢の言葉で一気に冷めたのか、タダクニに申し訳ない事したと思う2人。

「そもそもアイツに彼女フラグなんかが・・・なはっ!?」

ドガラシャアアアアアアアアンッ!!

「どうしたヒデノリ!?」

窓から外を見ていたヒデノリが突如として、周りにあった机を巻き込んで激しく転倒した。

「たっ・・・タダクニが・・・」

「タダクニがどうした?」

そう言って窓の外を見るヨシタケ、その視線の先には・・・。

西高生徒の制服を着た女子と一緒に歩くタダクニの姿があった。

「たっ・・・タダクニが女といやがる!!」

「「「「「「「な に い い い い い い い い い い い いいいいいいいいいいいっ!?」」」」」」」」」

「「「「「「「マ ジ か よ お

おぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ!?」「「「「「「「「

ヨシタケの言葉にクラスメイトの殆どが窓に集結。

「マジだ!!」

「何なんだあれは!?」

「本当に人間かあいつ!?」

凄い言い様だ・・・男子校の生徒とは皆こういうものなのだろうか?

「あの野郎・・・やっぱり彼女フラグ建ててやがった・・・」

「何だよその話!?」

「詳しく聞かせろ!!」

抜け駆けは許さないと言うのは、男女関係無い物なのかね・・・その必死さがうかがえる。

「落ち着けカス共ォ!!」

「ヤンキーのモトハル!!」

生徒会に属するのにヤンキーと言うなんともややこしい立ち位置の強面男子のモトハルが騒ぐ男子を治めた。

「観察しろ・・・よーく観察するんだお前等、何事もな・・・」

ユックリと、落ち着いた様子で窓際に立ち、女子と歩くタダクニを観察しだした。

「一見親しく、そして楽しげに会話している様子だが、歩行速度はバラバラ・・・まだ互いの歩幅を知らない証拠だ」

「おぉ・・・さすがヤンキーのモトハル」

「凄まじい洞察力だ・・・」

「ヨシタケ、ヒデノリ、お前何か心当たりが有る様だが・・・」

「はっ！一週間前西高生徒の生徒手帳を届けたとの情報が！」

「そして持ち主の性別を問質した時、激しく抵抗しました警部殿」

「成程・・・となるとあのお嬢さんがホシの重要参考人と言う事か・・・」

しかしどうやら彼自身も内心落ち着いてないのだった。

「以上の事から、2人はまだ知りあって日が浅く、付き合っていなと推測できる・・・だが、それも時間の問題かもしれん。

となると・・・俺達の成すべき事は・・・分かるな？」

いや、タダクニの妨害を心算している辺り、他の男子よりも焦っている様だ。

「各員・・・童貞力を限界まで高めろ・・・作戦開始!!」

命令するとそれぞれに動きだす男子達・・・ノリが良いね。

「あれ？ミツオ君は行かないの？」

「あぁ・・・唐沢が西高生徒って聞いてまた・・・」

「うぼヴぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ　!!」

「またかよ!?」

「面白そうだけど・・・唐沢の介抱してるよ」

「そうか・・・お前達の分まで戦って来るからな！」

「いってら～～～程々にな～～～」

意気揚々とタダクニの所に向かうヨシタケ達。

しかしこの時彼等は気付いていなかった、そこにかつて自分達を恐怖のどん底に陥れた悪魔がいる事に・・・。

第18話『タダクニの同伴少女』

ヤンキー（生徒会所属）のモトハル率いる、「タダクニ彼女獲得阻止団」が待ち構えている事を知らず、校門前までノコノコと西高女子と来るタダクニ。

しかし彼等も1つだけ知らない事がある・・・その女子が誰かである事を・・・。

「ん？」

「よお・・・タダクニ・・・」

「あぁ・・・モトハル、遅れて悪い・・・ちょっと用事ができてな、でも丁度良かった、お前に用があって・・・」

「今日はさみーだろ？何でか分かるか？」

「って話聞けよ」

「今からてめーの春を殺すからだ・・・」

「どうした？意味が分からん・・・お前の頭が春か？」

モトハルの若干イタイセリフの意図が分からず、春の陽気に遂に頭がやられたかと思ったタダクニ。

「もう気付いてんだろ？逃げ場はねえってな」

タダクニと同伴する女子を囲む様に現れるクラスメイトことタダ

クニ彼女獲得阻止団の面々。

「たっ・・・タダクニ君、この人達って？」

ぴくっ・・・

(((((((((たっ・・・タダクニ君・・・だと!?)))))))))

同伴する女子に、しかも何処か幼くも可愛らしい声、それとぱっと見た感じ可愛い女子に君付けで呼ばれるタダクニを・・・。

(タダクニめ～～～っ!!)

(赦すまじタダクニ!!)

(俺達の・・・いや！我等真田北高生徒全員の敵だ!!)

(俺なんて・・・俺なんて・・・最後に女子に君付けで呼ばれたのは幼稚園卒園の時だってのに!!)

(俺なんて君付けで呼ぶのなんて・・・お母んだけだぞ!!)

(ギルティ～～～～～!!)

(判決は決まったぜタダクニ・・・キサマは有罪で死刑結構だ!!)

タダクニ彼女獲得阻止団の面々は嫉妬の炎を燃やし、血涙を流しかねないほどに睨む。

それ故に気付けなかった・・・嘗て恐怖を植え付けられた存在である事を・・・。

「あぁ・・・気にしないで、何かのドラマの影響か、春の陽気にバカを拗らせただけだから」

まったくもって酷い言い様であるが・・・ノリが良い分本当の事である。

「さて・・・遺言はそれだけか？ところでお隣のかわいこちゃんは何者だ？答えろたd「あれ？ひょっとして桂木君？」くぇ？」

いきなり初対面である筈の女子から、言われ慣れない苗字の方で呼ばれた事に驚くモトハルこと桂木元治。

「あれ？羽原さん・・・モトハルの事知ってるの？」

「「「「「「「・・・えっ!?」」」」」」」

「んん？如何したんだお前等？」

ヒデノリを除く全員が、タダクニが言った名に驚愕する。

「うん同じ小学校で、クラスメイトだったから・・・あっ、覚えてないよね？羽原・・・優衣だよ・・・」

(((((((((はっ・・・・はははは・・・羽原あああああああああああああああああああああっ!?)))))))))

その時彼等は初めてタダクニと同伴していた女子の顔を確認した・・・髪型は違うが、確かに当時の面影が残るその女子は、

嘗て自分達を恐怖で支配した・・・谷田東小のアークデーモンこと羽原優衣その人であった・・・。

「あれ？じゃあ俺も同じじゃないか」

「えっ？」

「俺も同じ谷田東小だったんだ」

「えっ!?そうだったの!?」

(((((((何でお前そんなに平然と会話できるの!?)))))))

皆さんお気付きであると思いますが、今ここに居るタダクニ彼女獲得阻止団の面々は、ヒデノリを除いて全員が、同じ小学校、他校関係無く、嘗て羽原に苛められた事のある被害者達である。

そんな彼等からすれば、同じ小学校だったにもかかわらず平然と彼女と会話するタダクニがある意味で勇者に見え、ある意味異常者にも見えたのだった。

「だったら気兼ねなくて済むな・・・モトハル」

「えっ!?なっ・・・何だ？」

突然ふられて動揺するモトハル・・・そして次のタダクニの言葉に気を失いそうになるのだった。

「羽原さんを生徒会長の所まで案内してあげてよ」

「なっ!?」

「私の所の生徒会長が急に来れなくなって、プリントを送ろうにもＦＡＸが壊れてて、私が届けに」

「あの人結構落ち着きが無いと言うか、一か所に留まってないと言うか、お前なら何処に居るか分かるだろ？」

「あっいや・・・」

知ってか知らずか・・・いや、この様子では本当に知らないな。

タダクニは羽原をモトハルに任せようとする。

モトハルは断りたかったが嘗ての恐怖から声が出ないのか、それとも生徒会の一員としてなのか断れないのか・・・本人も分からない。

「じゃあ頼んだぞ・・・羽原さんまたね」

「うん、送ってくれてありがとうタダクニ君、またね」

タダクニは校舎へ入って行き、羽原はモトハルに近付いた。

そして羽原の存在に勢いをなくしたタダクニ彼女獲得阻止団の面々は、モトハルを除きタダクニと共に校舎に、

その足取りは重く、口々に・・・。

（後・・・頼むな・・・）

（大人しくなったって噂だから命までは取らないだろう・・・多分）

（モトハル団長に敬礼!!）

申し訳なさや励ましやら・・・そんな言葉をモトハルに送った。

その後・・・モトハルが如何なったのか・・・誰も知らない・・・。

「勝手に殺すな!!ちゃんと生きてるわ!!」

第19話『タダクニの同伴少女の正体は？』

「なあ・・・お前等急にどうしたんだよ？」

今朝の「タダクニ・女子同伴の乱」にて、モトハルを筆頭に集まった「タダクニ彼女獲得阻止団」。

最初はタダクニをフルボッコにしてでも彼女を作る事を阻止しようとしていた面々だったが、その同伴していた女子の正体を知ってから様子が一変した。

そしてその原因を唯一知らないヒデノリは、事の詳細を同じく参加していたヨシタケに問いただそうとしていた。

「・・・今はタダクニが居ないから良いか・・・」

「何？タダクニが居ちゃまずいの？」

「いや・・・何と言うか・・・タダクニにとっちゃ、結構シビアな話と言うか因縁があると言うか・・・」

「えっ？」

「あの女子・・羽原優衣は俺とタダクニと同じ、谷田東小の同級生だったんだ」

「へえ～～～いわゆる幼馴染と言うやつですか・・・羨ましいですね～～～このやろ～～～」

「そんな良い物じゃない・・・」

「へっ？」

「アイツには・・・俺達の間ではこう呼ばれていたんだ・・・〝谷田東小のアークデーモン〟と・・・」

「何ですかそのド○クエのモンスターの様な物騒なあだ名は？」

「アダ名じゃねえよ・・・当時は俺達にとって悪魔みたいなものだったんだって・・・」

ヨシタケは静かに語り出す・・・当時の幼き頃の悪夢を・・・。

弱い者イジメは当たり前の暴虐ぶりと、勝負を挑まれれば真っ向から挑み打ちのめす武人ぶりの暴虐武人。

イジメも数や陰湿なものではなく、純粋な力によるもの。

それ故に当時の男子達は力で女子に負けた等と、ましてやイジメられた等と、口が裂けても言えなかったので、

保護者や教師達はその事は一切知らなかった。

「お前もイジメられたのか？」

「俺は勝負を挑んで負けた・・・完膚なきまでに・・・」

当時の事を思い出してか、何時になく凹むヨシタケ。

「お前も物騒な事してんな・・・」

「それからだよ・・・俺に地獄が回って来たのは・・・」

「はっ？」

「アイツは真祖のＳだ・・・一度イジメた相手、負かした相手はかまわず万遍なく暴力を振るって来る・・・それも泣こうが喚こうが・・・」

「うへ～～～じゃあ・・・タダクニもイジメられてたわけ？何か因縁があるんでしょ？」

「・・・・・・・・・」

「どうしたの？」

「いや・・・アイツはイジメられていたと言うよりは・・・止めようとしてたんだよ」

「へっ？」

「前話したけど、タダクニは喧嘩が強くてツッコミポジション、最終的に騒ぎを止めるのは何時もタダクニだって」

「あぁ・・・」

「その所為かよく喧嘩の仲裁とかにはよく呼ばれた、何だかんだで責任感も強くて困ってる人をほおっておけないって奴だ」

「あぁ・・・そう言えばそうだな・・・」

「そんな奴だから・・・羽原を止める為に挑んだんだよ」

「・・・結果は？」

「惨敗・・・それでもタダクニは羽原を止めようと、幾度となく挑んだ」

陰からその様子を見ていたヨシタケ。

何時もボロボロにされても立ち向かうタダクニは痛々しく、それでいて勇ましく見えた。

「でもさ、そんな娘ならタダクニは何で覚えてないんだ？同じ小学校に通っていたと知ってもお互い知らないって様子だったぞ」

「多分だけど・・・タダクニは一度も羽原と同じクラスにはならなかったんだ、でもアークデーモンの事は知っていた」

「それって・・・あだ名で呼びすぎていて、本当の名前を忘れた、もしくは知らないってパターンか？」

「多分半々だと思う・・・俺だって〝アークデーモン〟としか呼んでいなかったし、顔と名前が一致しないのもそうだろうな、

雰囲気も髪型もあの時と全然違うし」

「じゃあ・・・あの娘の方は？」

「あぁ・・・それは・・・普通に知らないんだと思う」

「えっ？何で？」

(喧嘩挑む時は何時もの仮面をかぶっていたからな・・・名前も名乗ってなかったし、俺も最初は仮面被って挑んだしな)

当時タダクニとヨシタケを始めとする数人の男子でやっていた、仮

面を被っていじめっ子等をぶちのめす遊び。

タダクニはアークデーモンに挑む時もその仮面を被って挑んだ、勿論ヨシタケや他の男子も。

その為アークデーモンはその時の仮面の男子の正体は知らない。

「おいヨシタケ」

「まっ・・・ちょっとな・・・それよりさ、問題はタダクニが羽原を如何思っているかって事だな・・・」

「いや・・・あれは明らかに意識しれるでしょ？」

「だよな・・・俺達からしたらありえないよ」

「でもよ・・・結構可愛かったよな」

「うん・・・可愛いのは認める、当時も悪魔でなければ普通に美少女だったからな」

「何か・・・タダクニに教えたら教えたで面白いんだけど・・・」

「ちょっとな・・・」

「ちょっと様子を見て見るか」

「そうだな（それにタダクニにとっても、羽原との喧嘩は・・・）」

「ヨシタケ？」

「そう言えば・・・羽原関係でミツオ君の面白い話があるんだけど」

「えっ？何何？」

（これは同じ男として、俺の胸の内にしまっておくか）